Zoom Up Tome 2023 Special

全国の舞台で活躍した本市の小中高生たち 彼らの挑戦に迫る

第31回WBSC U－18ベースボールワールドカップ優勝
第105回全国高校野球選手権大会準優勝

髙橋煌稀、尾形樹人（仙台育英学園高３年）

８月６日から23日まで開催された全国高校野球選手権大会で、仙台育英学園高硬式野球部は準優勝を成し遂げた。

迫町出身の二人は、小学生の時から同じチームでバッテリーを組んできた。捕手の尾形は、冷静な状況判断で打者を分析し最適な配球を組み立てる。髙橋は切れのある直球と安定した制球力に定評がある投手だ。

「ずっと一緒に頑張ってきて、出場メンバーに選ばれなかった仲間のためにも勝たないといけない」と仲間の思いを背負い、挑んだ初戦の浦和学院（埼玉）戦では、尾形の打撃がさく裂。タイムリーヒットやホームランを放ち勝利に導いた。３回戦の履正社（大阪）戦では、６回から髙橋が登板。ランナーを背負うも、髙橋の持ち前の制球と尾形の的確なリードで切り抜けた。同点で迎えた８回には尾形のスクイズが決まり均衡を破る１点を獲得。髙橋の気迫あふれる投球で１点のリードを守り切り、接戦の末に勝利し、「最高のプレーができた」と二人は声をそろえた。続く、準々決勝、準決勝も力を発揮して勝ち進み、迎えた慶応義塾（神奈川）戦。強力な相手打線に苦戦し、尾形が３安打の活躍を見せるも一歩及ばなかった。大会連覇を目指して、甲子園を決勝まで戦い抜いた二人は、大会を振り返り「昨年に優勝を経験しているので、悔しい気持ちが大きいです」と勝利への貪欲な姿勢を見せる。

８月31日から９月10日まで、台湾で開催されたU－18ベースボールワールドカップでは、日本代表として各国の代表を相手に健闘を見せ、日本の優勝に貢献した。「甲子園とワールドカップの経験を生かして、将来はプロ野球選手になって日本や世界で活躍したい」と、さらなる野球経験の積み上げを誓い、二人は新たなステージを目指し歩みを進める。

第８回全日本中学女子軟式野球大会 準優勝

左から、須藤 愛紅（登米中２年）
目黒 心寧（南方中１年）

東松島市を拠点に活動する中学女子軟式野球チーム、宮城デイジーズに所属する須藤と目黒。８月17日から23日まで開催された全国大会で、チーム初となる準優勝に輝いた。

東北大会で優勝して迎えた全国大会。日頃から鍛えた守備力を武器に勝ち進み、準々決勝では須藤の先制打を契機に打線が爆発。４強進出を決めた。続く準決勝、須藤が２試合連続となる先制打を放つ。終盤に逆転を許すが、直後の攻撃で、須藤が左前安打でチャンスをつくり、後続の逆転打で勝利。決勝へと駒を進めるが、開催地である京都府代表の投手を打ち崩すことができず、悲願の全国制覇には届かなかった。

「目標は達成できませんでしたが、最後まで笑顔で戦うことができたので悔いはありません。今年の経験を生かして、来年こそは優勝できるように頑張ります」と、二人は笑顔で全国制覇を誓い合った。

第45回全国中学校ソフトボール大会出場

佐沼中男子ソフトボール部（後列左から、齊藤悠希（１年）、相模獅音（１年）、佐藤友和（１年）、佐々木剛琉（３年）、猪股魁（３年）、鈴木涼玖（３年）、菅原遥斗（３年）、前列左から、高橋巧（３年）、千葉悠成（３年）、髙橋珠惺（３年）、森田響太（３年）、武川瑠史（３年）、佐藤一穂（３年））

８月２日に香川県で開催された全国大会に出場。鍛錬を積んだバッティングを武器に強豪へ立ち向かった。惜しくも、初戦を突破することはできなかったが、「全国レベルの相手と試合し、貴重な経験ができて良かったです」と振り返る一同。佐沼中男子ソフトボール部は今回の大会をもって休部となる。今までの部活動を思い返し「これまで支えてくれた保護者や先生をはじめ、関わってくださった全ての人に感謝しています」と語った。